

「通学路脇に深い側溝」豪雪時、車が何台も転落など指摘し、改善訴え 新井柿崎線整備促進議員連盟の現地調査で関係地域住民が要望

県道新井柿崎線整備促進議員連盟の現地調査と県上越地域振興局への要望活動が31日、行われました。いつもは上越市区選出の県議さんも同行するのですが、この日は海外出張などで全員が都合悪く、秘書さんが2人同行されたのみでした。

現地調査では、県に要望する21か所のうち、7か所で車を降り、地元町内会長さんなどから要望をお聴きしました。

7か所の現地調査では、「ここは通学路。子どもたちが落ちないように、一時も早く側溝改良を」「危険度からいえば、ここは一丁目一番地だ。カーブで大型車が通ると、歩行者は危ない」「深夜、大型車が通るたびに震度3から4の揺れに悩まされている」「猛吹雪の時に車が何台も落ちたのを見たことがある。早急に防雪柵の設置をしてほしい」「歩道がフラットでないため、高齢者の電動カーが転ぶこともある」「冬になると歩道が使いものにならない。子ども

もたちは車道の端っこをびくびくして歩いている」などの切実な訴えが相次いで出されました。すでに手がつきはじめているところもありますが、なかには何年も同じ所で同じ要望が繰り返されているところもあります。通学路など市民の安全にかかわる箇所については急いでほしいものです。

現地調査が終わってからは、県上越地域振興局の地域整備部の部長などとの意見交換会でした。

このなかで田辺地域整備部長は、「財政事情があるので、要望を受けたところは優先順位をつけてやっていきたい」「幅員の狭いところは戦略的に考えて対応していく」と挨拶しました。この日の現地調査で一番早く整備が必要と言われている三和区下中地内の改良については、中川道路課長が、「ようやく事業化が決まった。これは粘り強い要望活動の結果だ。ただ、地区困難の場所もあり、スタートが遅れて



【ヤマノイモ】漢字で「山の芋」と書きます。ヤマノイモ科の多年草の植物です。小さな玉の個性的な花は白。秋にはムカゴをつけるので楽しみです。写真は吉川区代石にて撮影しました。

る」とのべました。また、同課長は、今後の整備手法にふれて、「車道や路肩を広げていくという切り口で要望を実現していくことも考えなければならぬのではないか。上越市などと相談しながらやっていきたい」と答えました。また、多くの町内会長が参加して要望活動を行っている梶十文字周辺の固定型防雪柵の設置に関しては、近藤維持管理課長が、「昨年から事業化された。いま、設計を直しつつ、高橋新田の方から工事を始めていきたい」と語りました。(一番上の写真は吉川区梶地内で市議メンバーや関係者に要望する地元代表の五十嵐文吉さんなど。2枚目は頸城区両増田地内の亀裂の入った路面、3枚目は、三和区下中地内のカーブ。4枚目は板倉区吉増地内の危険な道路側溝です)



新潟市で開催の自治体学校へ

4日、5日と新潟市で開催される第55回自治体学校に参加してきます。

主催は自治体学校実行委員会。今回のテーマは「みんなで作るホンモノの地方自治」です。3日の全体会は越後よしかわやっただれ祭りに参加、4日の分科会では、「孤立を防ぐ地域コミュニティ」を学んできます。

橋爪のりかずの
市政レポート

NO 1616
2013.8.4

発行・編集 日本共産党上越市議 橋爪法一
TEL 025-548-3628 (有線) 4867
E-mail hasiznyg@ruby.ocn.ne.jp
URL http://www.hose1.jp/

左記の電話が通じない時、こまった時は橋爪法一の携帯電話へ
090-5392-1961

なんとという心地良さでしょうか。風が静かに通り過ぎるだけなのに、まるで別世界に入ったような気分になります。今回は、暑い夏の日には風が起こり、風が流れていくときの短い物語です。

数日前、市役所で仕事をしていた私は、久しぶりに、直江津の石橋にある食堂・喫茶、「あひる」へ出かけることにしました。

市役所の正面玄関を出て、数秒後、夜間入り口の見える場所へ足を運び入れた瞬間のことです。石の階段の下の方から風が吹き上げてきました。ケヤキやカエデなどの木の下で、私の腕や顔をなでるようにして通り過ぎていく風はひんやりしていて、思わず、「わーっ、気持ちいいー」と声を出してしまいました。その時、階段の掃除をしていたTさんが私の声に気づいて、「そうなんですよ、ここは一番いい風が吹くんです」と言いました。Tさんは吉川区原之町から通ってきている人です。

「あひる」へ出かけることにしたのは、言うまでもなく、昼食をとるためです。それと、この店を経営しているS子さんに会いたい気持ちもありました。

この日の定食はコーヒー付きでわずか五百円です。この日は、イワシや昆布などの煮物、やわらかく煮込んだヨウゴ、ダイコンの漬物などがおかずでした。

定食を食べ始めてまもなくのこと、S子さんは、尾神に住んでいる私の伯母とその家族について語りはじめました。

「あんたんちのすぐ上の家にいぎなつた嫁さんの話、母親から聞いててね、いつも語り草のようにしてらるんです。少し障がいもつておられる方いらして、その方と上手に付き合ってくんなくてね、あそこのおばあちゃん、『おらちには日本一の嫁が来た』と言ってなつたもんだと語っていました」

すでに九〇歳になった伯母の、若かりし頃のことをそこで聞くことになろうとは思っていませんでした。でも、程度の差こそあれ、障がいを持った家族のいるS子さんにとっては、心の支えになるような記憶だったのでしょうね。いまでも、いろいろな人に伯母の話をしているということでした。

この日の定食のおかずの中で特に印象に残ったのは、冷たく、すっきりした味のヨウゴです。これがまた美味しかった。「これ、ヨウゴだよ」と訊くと、S子さんは、「そうです。安塚の人がくださったの」と教えてくれました。

S子さんが語る何十年も前の伯母の話は、ヨウゴの味とともに私の体の中にさわやかな風を送り込んでくれました。また、四十数年前に亡くなった伯母の家の、体格のいい「おばあちゃん」のことや尾神にあったわが家のことを思い出しました。

そう言えば、あのおばあちゃん、お茶が大好きで、暑い夏場でも毎日のようにわが家にお茶飲みに来ていました。小さな池のそばを通る近道もあつたけれど、おばあちゃんには大きな体を揺さぶりながら、ひんやりした空間となっていた「御前様井戸」のそばを通って自分の家とわが家とを行き来していました。

S子さんは私と同郷の人です。帰り際に駐車場まで見送ってくれたS子さんに、「子どもの頃、『おしたむき』で一番涼しかったのはどこだいね」と尋ねたら、「そりゃ、『おもや』の井戸のそばだわね」という答えが返ってきました。思い出しました。たしかにあそこには井戸があつて、子どもの時分、何度か水を飲ませてもらいました。そして、その井戸の下の方から涼しい風が吹き上げていたことも……。

小木直江津航路の新造船計画概要、明らかに

佐渡汽船株の小川健社長は7月24日、小木直江津航路の新たな運航体制に向けた新造船の導入についての文書を村山秀幸上越市長に提出しました。これは25日の市議会文教経済

常任委員会で市側が明らかにしたものです。

この中で小川社長は、「中型高速カーフェリーによる一隻体制の運航を視野に」入れながら、「7月下旬に造船会社数社より技術的な提案を受ける予定で、弊社が策定した『高速カーフェリー基本コンセプト』12項目に基づき、条件を満たす船舶の検討作業を進めて」いるとして、支援を求めています。

同社が導入するとしている船舶の概要は、航海時間が片道100分以内、速力は約30ノット以上。搭載人員は約700名。搭載車両は乗用車みの場合で約150台。就航時期を平成27年7月としています。船価は上限60億円です。基本コンセプトとしては、既存岸壁に適合、安全性重視、バリアフリー化、就航率確保など12項目をあげています。

同社としては、今年の9月

に造船会社と建造契約を締結し、平成27年の6月までには建造、同年7月に就航したい考えです。

この日の委員会では、秀沢産業観光部長がこれまでの運航体制検討経過などを報告するなかでこの文書についても説明しました。委員からは、「県の支援方法、佐渡航路確保維持改善協議会の在り方についてよく理解できない。県、佐渡、上越、佐渡汽船の4者で協議をして決めていくべきではないか」「基本的には早く建造してほしいが、県の品性のなさを感じる」「ちまたでは上越市の負担分は3.6億円だという話が流れているが、実際はどれくらいになるのか」などの声が相次ぎました。県に対する批判の声が出るのは当然です。

佐渡汽船が現在進めている新船舶の検討結果は今月上旬には出るとのことです。その時点で開催される文教経済常任委員会には佐渡汽船株も出席して説明するという予定です。

上越地域各消防署における空間放射線量測定結果（測定は毎日午前9時。数値はマイクロシーベルト。1時間当たりの測定量です。消防署によると、通常の範囲は1時間当たり0.016~0.16μSv（マイクロシーベルト）だということです。

	7月24日(水)	7月31日(水)
上越南消防署	0.040	0.040
上越北消防署	0.050	0.040
新井消防署	0.047	0.050
頸北消防署	0.050	0.046
頸南消防署	0.050	0.040
東頸消防署	0.047	0.047
高土分遣所	0.050	0.053
名立分遣所	0.057	0.050